

アメリカ人の精神構造 (二)

野 口 彦 治

アメリカ人の寛容と狭量

アメリカ人の寛容と狭量は、時により場合に依じて、さまざまな現れ方をしている。政治においては、歴史的に、言論、出版、信仰の自由を求めており、実践している。辺境においては、おおらかに、さまざまな実験を奨励した。宗教および哲学においては、人間の平等を認め、トランセンデンタリズムもプラグマチズムも、ともに個人の尊厳を主張し、個人主義を高揚した。州においては、地方分権制によって、行政上の実験的施策にたいして大幅の自由を許してきた。しかしこのような寛容とはうらはらに、極端な狭量が暴露した時代もあった。

異民族接近の当初においては、先住の白人は、後れて到着した諸民族に対して、反感と侮辱と嫌悪の感情を露骨に示した。ピルグリム・ファーザズはカトリック教徒を除け者にした。しかし、やがてこの両者はあいたずさえて、ユダヤ人を虐待した。つづいて移住したアイルランド人、ドイツ人、ポーランド人、スロバキア人、イタリア人、インド人、中国人、日本人、フィリッピン人、メキシコ人がつぎつぎに先着民族から迫害された。アメリカにおける諸民族間の軋轢は、先着民族の優越感と特権を主張する態度によるばかりでなく、ヨーロッパその他の地域における諸民族間の軋轢を、そのまま新大陸に持ちこんだかたちでもあった。しかし、新来諸民族のアメリカ化がすすむにつれ、

また、その経済力が強まるにつれて、先着民族は親和協調の精神をしめしていった。新旧諸民族は、相互の便益のためには、人種的社会的相違を是認せざるをえなくなったのである。彼等のこのような協調は、ただに寛容の精神の發揮にとどまることなく、やがて、南北戦争その他の困難を越えて、偉大な団結力に発展していったということは、アメリカ史における奇跡ともいふべき事実である。

寛容の精神の必要をきわめて素朴なたちで示している一例として、ベンジャミン・フランクリンが、一七八七年九月の連邦会議でおこなった演説の一部を引用する。

「議長、わたくしは、この憲法には、現在賛成することのできないいくつかの部分のあることを認めております。しかしこれは将来においても絶対に賛成できないものであるという確信はありません。と云いますのは、長い人生をいきてまいりますと、たとえ重大な問題であっても、より勝れた情報を得たとか、熟慮を重ねたということによって、かつては正しいと認めたことであっても、後になっては、その誤りであったことを悟ることがあり、意見を修正しなければならぬ場合が決して少なくなかったからであります。それ故、私は年を経るにしたがって、しばしば自分の判断に疑いをいだくようになり、他人の判断に一層の敬意を払うようになったのであります。実際、多くの人々が、宗教における教派と同じように、自分だけが全き真理の把握者であり、自分と意見を異にする人々は誤っていると考えがちであります。……これを要するに、本会議の全委員諸君が、今でも反対の意見を持っていられるであらうが、この場合、私とともに、絶対確実とみずから認めている判断に対して、いささか疑いの心持ちを入れていただき、全会一致の表明をいたすべく、全委員諸君がこぞって本証書に署名されることを希望せずにはおれません。

……

このようにして、アメリカ合衆国憲法は、さまざまの不備、見解の相違を含みながらも、フランクリンの互譲協調の

呼びかけによって成立したのであった。

これはフランクリン個人の考えをあらわしたものにすぎないが、この長い引用をあえてしたのは、「最初のアメリカ人」という愛称で、長く一般アメリカ人から敬愛されているフランクリンのこの演説が、現在なお多数のアメリカ人に親しまれており、感銘を与え、彼等の良識を育てるものとなっていることを考えたからである。フランクリン自身この憲法には必ずしも全面的には賛成してはいなかったのであるが、彼は、いかなる憲法をもってしても、万人を満足させることは困難であることを承知しており、当時としては、この程度の憲法が、多数の賛同を得る最善のものであることを認めていたので、協調互譲の必要を説いたのである。

現在アメリカ人は、各自の自由意志によって、無数の任意団体をつくっている。権威に追従することを嫌うアメリカ人は、政党や官僚に頼ることを能うかぎり避けて、さまざまな困難な社会問題を、みずからの手で解決しようとしている。これによって、宗教、教育、社会福祉、趣味、娯楽、体育などの各般にわたって、多数の人々の要望や興味関心を満足させ、実現することを目ざしている。寛容の精神が養成され発揮されるのは、主として、このような民間団体の活動のなかであり、このような団体の活動を成り立たせているものも寛容の精神にはかならない。

アメリカ人の狭量がめだつのは、おもに、政治と社会の分野においてである。彼等の狭量は、開拓の当初から、異民族に対するニューイングランド人その他の態度にも、南北戦争前の南部の黒人に対する白人の態度にもみられた。清教徒は、英国においては、信仰の自由を主張し、その主張が容れられなかったためにアメリカに渡ったのであるが、マサチューセッツに移ってから清教徒は、宗教的純正と統一を守る立場から、信仰の自由を許さなくなった。ロードアイランド植民地の創設者のロジャ・ウィリアムズは、教会と国家の分離を説いたために、マサチューセッツから清教徒によって追放された。教会の権威に反抗したアン・ハッチンスンおよびクエイカー教徒も、清教徒の排撃

をうけた。開拓者たちは正教的道德を守るために、多数のモルモン教徒をミズアリ州、イリノイ州から追放した。一八四七年多数のモルモン教徒がブリガム・ヤングに導かれてユータ州のグレイト・ソールト・レークに落ちのびたことは、教派間の争いと潔癖性の厳しさを思わせる大きな歴史的事実である。

このように、宗教が救済の故障となるものを排撃したと同様に、アメリカの経済は、繁栄をおびやかす一切のものに敏感であった。政治においては、大統領および議会を誹謗する者に対する罰則の規定。第一次大戦中の治安妨害およびスパイ活動禁止の法律。アリアン人種の優位を守ることを目的とする数百万の加盟者からなるキュー・クラックス・クランの活動。一九二〇年代の病的赤狩り。一九四〇年の外国人登録法。非米活動委員会。この委員会の目的は民主主義の原則に反する左右両翼の宣伝活動を調査することであったが、調査の対象がナチズム、ファシズムに向けられ、やがて、主として共産主義運動の取締りに移行していった。アメリカ人の狭量は、時には一貫性を欠き、外交上はエルサレムを援助しており、国内においてはユダヤ人を暗黙のうちに疎外している。憲法上保証されているニードロの市民権を州の法律や労働組合の規約が阻んでいるのは狭量の著しい例である。黒人は、アメリカの原住民として、あるいは先着移民として、アメリカの産業と戦争の貢献者として、音楽家として、オリンピックの優勝者としての誇りをもっている。しかし黒人の差別待遇は、黒人の能力にたいする低い評価によるというよりも、白人の感受性にもとづくものであるから、いかに白人の狭量を責めたても容易に解決はつかないだろう。窮余の一策としての「分離して平等に」の政策が長くつづくであろうと思われる。

アメリカ人の進歩性と保守性

アメリカ人の進歩性がはっきりと現われているのは、おもに、発明、工夫、実験の方面であり、保守性が認められるのは、政治、文化、経済の面であるといわれている。彼等の発明、工夫、実験の才能の発達は、辺境開拓の生活に

よるものであるが、それとともに、アメリカが、産業革命の時代に成長発展をとげたことによるものである。彼等は生活や環境に即応するための機械や道具を発明したり、工夫したりして、労力を節約し、作業の能率を増進し、生活を快適ならしめることに努めた。例をあげれば、綿繰機、汽船、刈入れ機、六連発拳銃、ミシン、硬質ゴム、電燈、電信、電話、有刺鉄線、タイプライタ、テープレコーダ、電子計算機など、無数に挙げられる。

アメリカ人は「よろず屋」と呼ばれるが、それは彼等が、どのような職業の人であっても、さまざまな機械や装置に興味を持ち、それらを製作したり、修理したりすることに長じているからである。

アメリカ人の保守的傾向についてであるが、アメリカ独立宣言の当時とくらべれば、現在のアメリカは、一大保守国家である。アメリカ人の政治上の新しい発想や改革は、おもに第十八世紀、十九世紀の初期に行なはれており、それ以後は、大きな改造はなされていないと言われている。既に出来上った法律や制度にたいする彼等の信頼が強く、変革の必要を認めていないのである。

合衆国憲法は一七八七年に制定され、その後いくたびか修正が施されてはいるが、憲法の根本原則は今日まで変わっていない。アメリカ人はアメリカ憲法の批判を嫌い、その変更を快しとしない。彼等はこれに変更を加えることは、聖書の十戒に手をつけるようなものだと考えている。

アメリカ人は、かつて、ルーズヴェルト大統領の時代に、ニューディール、武器貸与法、テネシー河流域の開発などによって、知恵と大胆さを示す革新政策を示したことがある。しかし現在の一般アメリカ人の政治意識は保守的と言っているであろう。彼等が民主的な立法権よりも司法権を一段と高いものとして伝統的に尊重していることにも、アメリカ人の心性の一つの傾向がみられるようである。

経済の分野での保守性については、J・K・ガルブレイスの「ゆたかな社会」のなかの言葉を引用する。「われわ

れの経済的態度がいかに過去の貧困、不平等、経済危機に根ざしたものであるかということを見るのが第一の仕事である。」

経済における適者生存の基本観念、能率を高めるための競争の重視、不況もインフレもあり得ないとするセイの法則への依存、独占企業によって技術的進歩をうながすべきであるという考え方、などにみられるように、ガルブレイスは経済に関するアメリカ人の考え方が、ゆたかな社会の今日でも、昔の貧困時代に考えられた経済学の古い観念そのままであることを詳説し、鋭く批判している。

尚このほかに、アメリカ人の保守性が文化の次のようなさまざまな面にあらわれていることを、H、S、コマジャが指摘している。

法人、株式市場、土地保有権、特許権、労働組合、映画、ラジオ、テレビ、広告、宗教、絵画、詩歌、建築様式、自動車工業。

アメリカ人の浪費癖

アメリカ人は物を大切にしない国民であるように思われる。彼等は、自分の持っている物が、まだ結構役に立つことを知っていても、外見やデザインや装置の変った新製品が出るたびに、取り替えたり、放棄したりする。廃物利用などという観念はほとんどなさそうだ。人間についてはもちろんだが、物が役に立つ間は、それを使い、物の終りを全うさせることが、そのものを成仏させる道であるというような東洋風の宗教心はもちろん乏しい。物資が豊富で、食料不足のために死ぬ人よりも、過食のために死ぬ人の多いアメリカ社会では、物を大切にする必要がないのである。物を大切にしないもう一つの理由は、アメリカ人は、広告宣伝によって生ぜしめられる欲望と見栄による欲望を、ひっきりなしに、開発されているからである。視覚聴覚を通して、アメリカ人の過剰な広告宣伝は、昼となく夜

となく、執拗に人々に迫り、浪費を奨めている。ジョージ・ミケツシュは、そのアメリカ印象記の中で、「広告とは人々に、その人々が欲しいとは思っていない物を、欲しがるようにしむける術であり、現在人々の持っているものに、不満を感じさせる術である。」と言っている。

物を持っている人間ほど物を欲しがる。従って、広告が威力を発揮するには、アメリカは絶好の場所である。アメリカ人にとっては、旧式の製品を持っていることは体面にかかわることであり、我慢のならぬことである。数年前に製造された自動車を今年も走らせていることは彼等のプライドが許さない。

開拓時代のヴァージニアの人々は、西に向って前進しようとした時、自分の家屋を焼きはらった。それは一度使った古釘を取戻すという経済的理由からであったが、堅木の家屋を焼きはらうことがいかに浪費であるかということにはあまり思いをいたさなかったようである。カリフォルニアその他の地域で、金鉱を開発するために集まった人々が、幽霊都市を後に残したまま、やがてそこを立ち去ったということは、同じく経済的理由によるものではあったが、アメリカならでは見られない浪費の一大典型である。尤も、この幽霊都市が、現在では観光の名所として利用されているから、アメリカ人に廃物利用の観念が全くないという見解は、修正を要するかも知れない。浪費の源は、やはり、無尽の山林原野の開拓者にあるだろう。開拓者の農業は粗放農業であり、略奪農業であり、農業ばかりでなく、彼等はあらゆる天然資源の略奪的使用と浪費をほしきままにした。アメリカ人の浪費は形をかえて、社会生活のさまざまな面にあらわれているが、彼等は浪費を浪費としてあまり意識していないように思われる。彼等の事業や企業的重要性は、その事業や企業の成果によるものではなく、それらに対して如何に莫大な資本を投下したかによるものである。能率を重んずるアメリカ人ではあるが、この場合の無駄な資本投下を彼等は浪費とは考えていないのである。

浪費は個人の場合よりも、公の機関の場合の方がはなはだしい。これは他のどこの国でもしばしば見られることだが、アメリカにおいては特に甚だしいようである。中央および地方の行政機関、陸海空軍、ラジオ、テレビ、映画、商業広告等、世界の他の諸国におけるそれぞれの場合をはるかに隔絶するほどの贅沢な運営が、当然のこととして行なわれている。戦争にしてもアメリカほど贅沢な大量消費の戦争をする国は、ほかにはない。

アメリカ人の移動性

アメリカ人はヨーロッパとちがって移動性の強い国民である。彼等の多くは一箇所に長く定住することはまれである。勿論、大会社や大農場の経営者、牧場経営者その他多くの例外のあることは言うまでもない。アーサー・ミラは「セイルズマンの死」の中で、主人公のウィリ・ローマンが二十五年間にわたって月賦を払い、自分の住んでいる住宅を自分のものにしようとする努力の空しさを描いている。ローマンの住んでいる家が正式に彼のものになった時には、その家に住む人がいなくなっているという結末である。アメリカの子供は、大人になって結婚すれば親の家には住まない。職業を変えることによって移住の必要がおこることもある。しかし彼等の異動性のみなもとを追求すると、彼等の先祖がはるかな大洋をこえて移り住んだという事実の一つの起動力を見出すことができるであろう。もう一つは、やはり、アメリカ大陸における開拓西進の習性によるものであると言えよう。一六〇七年のデイルムズタウン、一六二〇年のプリマスから始まった最初の植民者たちの西方は、三千哩にわたる無人未開の山岳であり、大森林であり、大草原であった。東海岸を南北に走る最高二〇〇〇米のアパラチア山脈が妨害となつて、初期開拓者はおよそ一五〇年間西進をはばまれたが、それにもかかわらず、この難關を突破して、一八五〇年にはミシシピイ河をわたり、一八九〇年頃おおよそ辺境が終りをつけるまで、多数のアメリカ人が移動をつづけた。開拓にともなう絶え間のない努力、冒険、災害、斗争、饑餓、困苦、疾病にもかかわらず、開拓者は大きな希望をいだいて奮斗的前進をつづ

けたのであった。二百年以上にわたるこの経験がアメリカ人の精神構造の形成に大きな影響を与えたことはたしかだ。彼等が現在はげしく移り動いていることの源が、ここにあるように思われる。彼等には、生れ故郷や、ある期間住んでいた土地との結びつきはよわく、気軽に住居を変えている。「殖生の宿もわが宿」の感傷は、アメリカ人のものではないようだ。この歌の原作者ジョン・ハウアド、ペインはアメリカ人であるが、彼は生涯の約四十年間を異国に流寓したそうである。アメリカ人にとっては、現在住んでいる場所がよい場所であれば、我が住みかであり、悪ければ、よりよい場所に移り住む、という考え方が当然のこととなっている。彼等の職業に対する態度についても同じことが言えるであろう。同一職業に三十年四十年も勤続して、表彰される人々が少なくなってきた。そればかりか、永年勤続はもはや美德とは考えられなくなった。彼等の移住が、このような心理的な原因によるものばかりでないことは勿論である。会社の経営者が社員の退職や配置転換を要求する場合が少なくないからである。たとえば好ましいところに住居をかまえていても、都市の人口増加と公害、交通機関の発達、一家の経済状態の変化などによって、多くの人々が移住をうながされる。彼等はある時は、田園の緑と静けさと清浄な空気を求めて郊外に住居を移し、またある時は、都市の刺激と便益にひかれて都市に接近する。精力的で苦労性のアメリカ人は、このようにして、落着きなく移動をくりかえしている。彼等の考案した移動家屋は、彼等のこのような欲求に応ずるものであるだろう。アメリカ人のだれもがいただいている切実な願望である我が家を持つことの喜びと、時におうじて都市の近くにも、田園のなかにも住むことが出来るという今様遊牧的生活の喜び、この二つを、彼等は、移動住宅によって満足させている。勿論、実際に移動住宅の生活をつづけている人々は、アメリカの人口からみればまだ問題にならない数であるが、移動家屋に住む人々の喜びが、一般アメリカ人の願望であることには変りはないであろう。彼等の移動性を可能ならしめるものに、都市と建築と道路とがある。都市は可能な場合には東西にも南北にもものびていく。建築は空高くのびて摩天楼

を築く。道路が郊外にむかつて四通八達する。

アメリカ人の移動性を地域的移動性だけに考えてはならない。それは彼等の精神的な面にもあらわれている。言うまでもなく、一般的傾向としてであるが、彼等は恣意的に、職業を変え宗教を変える。そしてあえて言うならば、彼等は妻を変え、夫を変える。離別は彼等にとって、すべての終りではない。やがて、多くの場合、あらたな愛情の相手を得て、新生活にふみだす。

アメリカ人は、このような地理的・心理的移動性のなかに、生甲斐をみいだしている。無限の流動性はアメリカ人の心理を支配する一つの大きな特色となっている。アメリカ人の典型とも言うべき作家マーク・ツェインの「ハックルベリ・フィンの冒険」は、アメリカ人らしいさまざまな事件とユーモアにあふれて、動機も教訓も筋もなく、延々と無限につづく性質を示している。アメリカ人の生活は、変化と無限の流動性である。彼等の最近の月着陸は彼等の移動性の一つの頂点を示すものである、といえるだろう。

アメリカ人の階級意識

アメリカには現在、英国におけるような伝統的に固定した階級はみられない。アメリカ人は最初から、階級というものには、無関心であったというよりも、嫌悪の情をもっていた。ヨーロッパの標準をもつてすると、十九世紀のアメリカには、南部を除けば、階級はなかった。しかし二十世紀後半の今日、アメリカ人の間に階級意識が芽生えており、階級がつくられつつあると言われている。彼等が階級として意識しているものの内容は、種類が多いことと、絶えず流動的に変化していることに特色がある。ニグロ、メキシコ人、南部の小作人を除いて、二十世紀中頃までに、アメリカ人の大多数は中産階級に属するようになった。それとともに、大局的にみれば、富による階級差別感が希薄になったことは事実である。しかし幅の広い中産階級の生活の安定感のなから、やや異質の階級意識が生れて

いる。アメリカにおいても、他の国々におけると同様に、財産、民族、家柄、教育などによって階級がつくられることは言うまでもないが、これらのほかにも、階級生成の原因がいくつかある。アメリカ人が紳士録を要望するようになったこと。新聞の社交欄を重視するようになったこと。初期植民者の子孫からなる愛国婦人団体が生れたこと。私立学校出身者であることの誇り。アメリカのすべての州に数多く見られるカンツリークラブの会員であることの誇り。レストランの献立表および学校の教科課程にフランス語を用いること。名望旧家の出身であること。映画、ラジオ、テレビのタレントであること。野球場、フットボール競技場にあらわれる花形選手であること。その他これに類するさまざまな原因によって、アメリカ人が自他ともに認める上流階級がつくられている。アメリカの商業主義はこのような雑多の上流階級の現れを歓迎しており、大いにこれを利用し助長しようとしていることは言うまでもない。アメリカ人の階級意識は、主として、このように種類の多い常に移り変わる上流階級がつくられているところに特色がある。

アメリカ人のプライド

アメリカは三百年にわたって、広大な土地に比較して、人口は少なく、限りないほどの天然資源にめぐまれている。大量のヨーロッパ人が移り住んだけれども、この豊かさの故に、人々は割拠して独立国を作る必要がなく、アメリカはヨーロッパのようにはならなかった。彼等の心は、アメリカ人として、新しい心性をつくり、彼等の生活は、新しいアメリカ的生活様式を発展させた。国民のだれもが、この生活様式を誇りにしている。

アメリカ人のプライドは、アメリカの自然資源の豊かさとその巨大な生産力に結びついているが、同時に彼等の志操の高さにも関係していることを見のがすわけにはいかない。

アンドル・カーネギーは、機会の国アメリカに住むすべての植民者たちをして、おのおのその志望を達成させよう

とする使命観にもえていた。彼は「富を得て死ぬことは恥を得て死ぬことだ。」（オスカ・ハンドリン「アメリカ人」）という考えをもつようになり、人類の進歩のために、その莫大な財産をなげだした。アメリカの富豪のすべてが、カーネギーと同じ考えを持っているとは言えないが、巨萬の富を得て社会の福祉と文化の向上のために利用することのできる人間が、一般アメリカ人の理想像だと言えるであろう。財産を持つものは財産を提供し、労働力をもつものは労働力を提供して、公益に奉仕しようとする傾向が一般にみられる。そして注目すべきこととしては、彼等は、富豪に反撥して、アメリカの富の水準を引下げようとは考えていないことである。彼等めいめいが、このような富豪の水準に多少でも近ずきうる可能性、それによって一段と高い公共奉仕をなしうる可能性、を信じているところから彼等のプライドが発していると思われる。

スタインベックは、「アメリカとアメリカ人」のなかでアメリカ人の気持を次のように述べている。「かつてはアメリカ人が外国を旅行する時、その土地の人々から好感を得ようとして、チップをはずんだり、品物を高い値で買ったり、その土地の風物をむやみに褒めたりしたものだ。しかし人に好かれようと努める人間は、しばしば、かえって人から嫌われたり、軽蔑されたりするということをアメリカ人は悟ってきた。今日、アメリカ人は他国人よりもはるかに多く海外旅行をしているが、彼等は、イギリス人、フランス人、ロシア人が彼等に好意を示すかどうかを問題にしていない。」アメリカ人は他人、特に他国人の批評にたいしては、きわめて敏感であり忍耐しない。アメリカ人の性格・習慣、作法、制度、文化が非難されるとか、アメリカの気候、風土、動物、植物が他国のものより劣っているというような言葉を聞く時、彼等は自分の欠点や弱点を知らないわけではないが、アメリカ及びアメリカ人の持っている無数の善美なものが賞賛されずに、欠点や弱点が取り上げられたということが気に入らないのである。他国人の批評には、他国の標準だけが最善のものであると考えられているとか、批評の根拠が薄弱

であるとか、的外れであるというふうに彼等は考える。彼等のプライドがそのように考えさせるのである。

アメリカ人は二度の大戦によって、自信をましてきた。彼等は、一九二九年の大不況は、突発的な事故であったと考えており、忘れ去ったかのようなものである。むしろテネシー河流域開発公団(TVA)の成功をよろこんでいる。国際オリンピック大会の成績、ノーベル賞受賞者の数も彼等の意気をたかめるであろう。世界の各地で見られる優秀な商品には、すべて、アメリカ製という商標がついていて、彼等は思いこんでいる。巨大な自然資源と世界最大の生産能力および国民所得を誇るべきである。米国民の自主性、独創力、勇気、活動力、大胆さ、寛大さをよろこび、アメリカの理想が善であり、正義であることを確信している。アメリカ人は誇り高き国民であると言わねばならない。

従って、アメリカ又はアメリカ人に関する他国民の批判や助言が容易にアメリカ人に受け入れられないことになる。アーノルド・トインビーは、「われら若し未来の波になろうとすれば」、および、「アメリカと世界革新」のなかで、アメリカに対して、きわめて好意的な助言を与えている。

それによると、アメリカは、ソ連との競争において、世界の人類の大多数の好意を得ることを望んでいる。ところが、アメリカから公の使命をおびて海外に派遣されている人々は、海外においても、PXを通じて、アメリカ的生活様式をつづけており、土地の人々の生活の中へ入りこもうとはしない。世界の人類のおよそ三分の二、あるいは四分の三が貧困にあえいでいる今日、アメリカの富裕とアメリカ白人の優越感は、アメリカとその他の国々との間に断絶を深めている。

人間は一人あたり、どの程度の物質的財産を持てば、人間の精神が自由に翼をのばして高く飛翔できるであろうか。アメリカはかつて人間の精神的権利を宣言した。そして今、人間の生存繁栄の最適条件の目標を人類の地平線上にもたらしした。このような最適条件を、世界のいたるところに実現するのが、アメリカの世界革新の真の目標である。

ことをトインビーは認めている。ここにアメリカ人の誇りがあるだろう。トインビーは、しかし、アメリカの富裕が、現在のところでは、アメリカと多数の貧困国家との間の友好関係にとって恐るべき障害となっていること、および、世界革新の前に、まずアメリカが自分の手で自国の革新にとりかからねばならないことを指摘している。自分自身にたいして、また、自分の国にたいして、誇りをもつことのできる人間はしあわせである。国家においても国民においても、誇りは発展向上の途につながる。しかし、それとは別に、アメリカは、現在その誇りの故に、世界の関心と批判をあつめているのである。

アメリカ人のユーモア

最初にユーモアという言葉の意味についてひとこと述べておきたい。「ユーモアの上乗のものは無意識的であり無目的である。ユーモアには他人との対抗意識も競争意識もない。われろれはユーモラスな人を攻撃する気持も擁護する気持も持たずに、ユーモラスな人を笑う。ユーモアの喜びは、ユーモラスな人の言葉や動作に感じられるのであって、それが他人に及ぼす効果にあるのではない。ウィットは攻撃の鋭さ、受流しの見事さが面白いのである。」

これはシェイクスピアの作品の解説者として高名なK・ダイトン編「むださわざ」の中のC・W・クルックの説明である。これはこの劇の中心人物であるベネディック、ビアトリクス、ドッグベリ、ヴァージズ等にはびったりあてはまるが、ユーモアの全豹を示しているとは思われない。

ユーモアは、かつて「有情滑稽」と訳されたこともあるが、ユーモアは、話者の暖かい気持から発するものであることはまちがいない。ウィットは、はっきりと意識的で、相手に対する冷静な批判から生まれる。とは言うものの、この二つは区別が困難であるために、しばしば同一のものであるように考えられている。ここでも、ウィットを含めた広い意味でのユーモアを考えているのである。

ユーモアはアメリカ人の心性の一つの特色となっている。ユーモアを理解し、ユーモアを作り出す能力はイギリスの紳士にとって欠くことのできない資質とされているが、アメリカ人についても同じことが言えるであろう。ユーモアは、自己憐愍の気持ちで、自分の欠点、弱点、失敗、当惑、理想などをみずから笑うことから発する場合がしばしばある。従って、ユーモアは自己反省であり、自我からの解放であり、他人に対する同情的理解でもあり、自分を笑うことによって他人を楽しませようとする心である。寛容の心、精神的余裕をもたない人間にはユーモアは生まれない。ユーモアは緊張をときほぐすものであつて、急速な機械化された現代社会の激動猛進や論争怒号のなかで、心の平衡を得させるものである。アメリカ人はユーモアを高く評価しており、よく笑い、大いに人を笑わせる。

人間の心理の一面にすぎないユーモアではあるが、それが文学として表現されている場合には、ユーモアと文化の発達との一致がみられる。アメリカ十九世紀のユーモアは田園風であり、のんびりして、誇張的で、気立てのやさしさがあり、日常的なものであつた。ユーモアは人々の結合と統一、社会の形成、アメリカ的生活様式をつくりだすのに役立った。二十世紀になるとユーモアは、都会的となり、辛辣になり、洗練され、意地悪さがまじり、人をびっくりさせ、人を楽しませるよりも、人の感情を害することがあり、人々を結合させるよりは分裂させることさえある。結局本来のユーモアの要素よりもウィットの要素がふえて来ていることになる。

それはとにかく、英米両国においては、牧師は説教に、政治家は政談に、教師は教育に、医者は治療に、弁護士は弁論に、学者は論説に、ユーモアをまじえる。儀式は厳粛であるべきだというような考えかたから、ユーモアの要素を全く抜きにした四角四面の儀式はアメリカにはみられないようだ。善良な市民であつても、ユーモアの感覚に乏しいことは、淑女として紳士としての資格に欠けるところがあると考えられ、不面目なことでとされている。

J・K・ガルブレスの「ゆたかな社会」では、いたるところでユーモアを感じさせられるが、次の言葉も、やさし

くたしなめられているようで、忘れられない。「経済学を立派な、思慮深いものにするために、必ずしもそれを不愉快なものにする必要はない。知的な活動をつらく思うために、その当然の結果として、自分のつらさを他人にも与えようとしている人々は、このような誤まりをおかすものだ。ユーモアに欠けた人が賢明であることは稀れである。また、書き方が下手なことは、ほとんどいつも思考の弱さと裏腹の関係にある。」

アメリカ人の理想主義

振りがえって顧みることのできる過去の文化をもたなかった開拓時代のアメリカ人は、現在を見つめるか、将来を仰望するしかなかった。荒野の辺境に立つ時、彼等はまず、個人が独立の生活を確立しなければならないことを痛感した。二歩三歩とふみだしているうちに、進歩というものにたいする信念が自然にできてきた。現在は困難にみちていたが彼等がその生国で経験した困難とはまったく異なつて、努力が報いられる明るい未来を感じさせられた。そこに彼等の理想主義の芽生えがあった。一六一九年、デェイムズタウンの木造の教会に集つて、相互の利益を守るために、植民者の代表が定めた協約は、当然のこととして、きわめて現実的ではあったが、旧大陸の制度の弊害をぬぐいさつて、新しい植民国家を建設しようとする雄図がみられる。一六二〇年のメイフラワ契約書、アメリカ独立宣言、合衆国憲法前文等には、全人類に普遍性をもつところの生命、自由、幸福の追求の三大目標が一貫してあらわれている。アメリカ人は植民地建設とともに将来の目標を明確にしたのであるが、このように、最初に、希望、目的、理想を設定して、生活や事業をおしすすめていくことがアメリカの伝統となつた。アメリカ人は、政治的に重大な時局に直面した時、社会生活において新しい協力体制をつくる時、高潔な理想をかかげる。一八二三年大統領デェイムズ・モンロウのモンロウドクトリン、第一次世界大戦の講和条件として一九一八年一月ウイルソン大統領が国会に示した「世界平和と自由の原則」、一九四一年八月ルーズヴェルト大統領とチャーチル首相共同声明の大西洋憲章、大

統領選挙のたびごとに示される政治綱領、独立記念日の大統領の演説、その他ロータリ クラブ、ライオンズ クラブ、キワーニス クラブ、エルクス クラブ、フリー メイسنズ、四Hクラブ、ガーデン クラブ、女子青年会など、無数の社会事業団体が、その憲章によって、その理想を表明する。

このほか、アメリカ人の理想を実現するための手段として、連邦主義、三権分立主義、民主主義の三原則を設定したこと、および、彼等の理想主義に合理主義と清教主義を加えてアメリカ哲学を成立させ、アメリカ人の精神的支柱をきずいたことも、彼等の目的追求のための合理性のあらわれとみてよいであろう。

アメリカ人は、自信にみちており、この世界が次第によい方向へむかっていることを信じており、人間のつくりだすさまざまな悪行を人間本来の姿のあらわれであるとは考えていない。彼等は、人間の本性のなかには、変えることのないあるものがあるという考え方を容易に信じようとはしない。彼等は人間の性格をさえも変えることができると考えている。性格は一種の材料であって、他の材料とおなじように、加工操作によって変化させることができる信じている。

アメリカ人は、人間の不幸の原因となるさまざまなものを、やがては取り除き得るという可能性を信じている。苦痛、貧困、欲求不満、病氣、老令のようなさまざまな不幸の原因を、人間が避けることのできない宿命であると考えて、諦めの態度をとるとか、それらを悲劇的な崇高にまで高めることによって、僅にみずからを慰めるというような態度をとらない。

アメリカ人は、アメリカ人のだれもが抱懷してきた生命、自由、幸福の追求の三大目標を、アメリカ合衆国においてのみならず、その他の国々においても、アメリカの協力によって、実現し得ると考えている。アメリカ人は、自由世界の価値を擁護することによって、アメリカおよびその他の自由主義諸国において、最高の国家的利益を追求でき

るであろうことを確信している。アメリカ国民の信念となつてゐるこのような理想主義は、アメリカの政治家や軍隊の指導者が時代の要請として、彼等が最善と考えるところの目的のためにしばしば利用される。この場合の権力者の考え方が一般アメリカ人の考え方と当然同一であるというふうに、アメリカ以外の国々においては考えられがちである。しかし一般アメリカ人は必ずしもそのようには考えていない。権力者に対する憎悪感の強い一般アメリカ人は、政府は政府、国民は国民という立場でものを考えるのが普通である。したがつて国民の理想が、時の権力者によつてどのように歪められようとも、政府の不手際や軍の大失態などによつて、他国人のアメリカにたいする不信感がどれほど増大しようとも、一般アメリカ人の理想主義的信念にvarietyはないであらう。

アメリカ人のこのような信念とは別に、彼等は現在多くの困難に直面している。アメリカ人はその理想と現実をどのようにして調和させていくかが問題である。世界最高の道徳的国家を自負するアメリカ人が、従来持ちつづけてきた道徳を腐敗や退廃からどのようにして守るであらうか。彼等の寛大さやお人よしの氣前をさらに増大させることができるであらうか。人種的斗争のなかで彼等は民主主義を守りとおせるであらうか。科学や合理主義と宗教とをどのようにして調和させていくであらうか。彼等の作つた原子力を、平和的文化的目的のためだけに使うであらうか。アメリカの偉大な智力や能力を「世界のアメリカ化」、以外の方面に使つていくことができるであらうか。世界の貧困国家はアメリカのような富裕を現在のところ望んではいないが、アメリカは両者の間の精神的な距りをどのようにして埋めていくであらうか。

アメリカ人は、世界で最も幸福な国民はアメリカ人であり、アメリカは世界の国々の模範となるべき運命を背負つており、従つて、全世界の人々がアメリカ的性格にあこがれているという自負心をもっている。また、完全なアメリカ的性格とは完全な人間性のことであるという自信をもっている。従つて、完全なアメリカ的性格によつて創造され

たアメリカの生活様式や思想や価値や芸術や趣味が世界の人々の賞賛を得ることは、アメリカ人からすれば、当然のことである。完全なアメリカ的性格の持主であるアメリカ人が世界の人々から信頼され親愛されることもアメリカ人にとっては当然のことであり、切望されることである。反米活動や非米活動に従事している人々は、アメリカ的性格の否定者であり、その故に劣れる人間であり、哀れむべき人間であると、アメリカ人は考えている。

アメリカ人は、善意にあふれたアメリカ的性格を発揮するという立場から、国際的協力を惜しまない。実際、世界の諸国にたいするアメリカの援助、特にその物質的援助は、他の諸国がおこなっている対外援助をはるかに卓越している。しかしアメリカ人が自負するところの善意が曲解されたり非難されたりする場合が従来しばしばみられた。そのような時、アメリカ人は、誇り高い国民として、激しい憤りを感じたであろう。アメリカの女性が批評や非難にたいしてきわめて敏感であるといわれているが、誇りを傷つけられた場合、アメリカの女性も男性も、感情的には大きな差異は認められないようだ。他国人の信頼や親愛を得ることがアメリカ人の願望であるのだが、アメリカ人の善意を認めることのできない人間にたいしては、彼等は空しさを感じ、ひいては国際協力の無意味さを感じるようである。一例を引く。

「アメリカはソ連とユーゴスラビアに武器貸与法によって武器と食糧を貸与し、国連救済復興機関にかなりの予算をさき、そのおかげで両国は勝利を得て、戦後の復興に大きな効果をあげることができた。しかし、それにたいしてアメリカは、感謝と友好的態度を示されるどころか、モスクワのアメリカ大使館は不承不承のソ連に援助の感謝を示すように説得しなければならなかった。ユーゴスラビアはアメリカの飛行機を撃墜してしまった。」(G・ゴラ「アメリカ人」)

一般アメリカ人は常に国民としての立場からものを考えており、アメリカの政府や軍部の施策や考え方にたいして

批判を怠らない。ソ連やユーゴスラビアでおこったこのような事態に類する事態がおこるたびごとに、一般アメリカ人は、その国の国民にたいしては勿論、自国の政府や軍部にたいしても、不信感をつのらせる。そしてやがては、国際協力の事柄についても孤立主義を台頭させるのが常である。アメリカ人の理想主義は、国内においては政府や軍の指導者によってしばしば誤用され濫用され、国外においては、誤解され、曲解され、非難や攻撃を受けることが従来あまりにも多かったようである。